

【研究会報告】

文学研究科プロジェクト

「文学研究・文化研究の方法とグローバル展開を探る」

（「日本文学を世界文学として読む」第2弾）

第1回定例研究会

日時／令和元(2019)年7月23日(火)

◆講演「翻訳と文学研究：アメリカにおける日本研究の現状と方法」

講師：ロバート・ティアニー教授（イリノイ州立大学アーバナシャン
ペーン校、東アジア言語文化および世界比較文学科）

◆総合討論



第2回定例研究会

日時／令和2(2019)年10月30日(水)

◆講演「書き換えられた「エピローグ」 — 大岡昇平『野火』の英訳現場から」

講師：片岡 真伊 (ロンドン大学 SOAS)

◆研究会 (シンポジウム)

「日本における西部劇イメージから記述する貫戦史：カウボーイ、カウガールを事例として」 永富真梨 (UCRC研究員／同志社大学、摂南大学非常勤講師)

「大阪市中心地域における訪日外国人観光客に対する地域の人たちの取り組み」 嵯本圭子 (UCRC 特別研究員／本学大学院・アジア都市文化学専攻)

◆総合討論



第3回定例研究会

日時／2019 年12月26日(木)

◆講演「日本文化史の再建から文学史の再編へ——概念の重要性」

講師：鈴木貞美 先生（国際日本文化研究センター・総合研究大学院大学
名誉教授）

◆研究会（シンポジウム）

「アテナイの「過去」を書き換える——『アッティカ誌』(Atthis) の成立と受容」
竹内一博（UCRC 研究員／神戸大学非常勤講師）

「日中における『聊齋志異』『画皮』の受容と変遷——近代の妖怪学の隆盛から現代
まで」
杜一葦（OCU 大学院文学研究院アジア都市文化学専攻）

「文学研究から文化研究へ——作品の読み方から考える「日本」社会の特性」
堀まどか（OCU 文化構想学部アジア文化コース准教授）

◆総合討論



第4回定例研究会

日時／令和二(2020)年2月18日(火)

◆シンポジウム（午前／午後）

「撰関期の和歌序について」

山本真由子（OCU 文・准教授／国語国文学・中古文学）

「近代日本文学におけるフェアリーの受容：イメージと翻訳」（仮）

永井泉（UCRC 特別研究員／本学大学院・国語国文学専修）

「世界史叙述メディアの新地平——学習歴史漫画を超えて」

草生久嗣（OCU 文・教授／西洋史学）

「ドレフェス事件からみる「ユダヤ」と「文学」」

鈴木重周（成城大学グローバル研究センターPD／UCRC 研究員）

「世紀末フランスと女優の下克上——サラ・ベルナール研究から」

白田由樹（OCU 文・准教授／フランス語圏言語文化学）

「『今鏡』と『大鏡』における后妃描写の比較」（仮）」

小笠原愛子（UCRC 研究員／国語国文学・中古文学）

◆総合討論および総括



第一回目の7月、前年度の「日本文学を世界文学として読む」の研究会に参加していただいたイリノイ大学のロバート・ティアニー教授をお招きして、アメリカにおける日本研究の現状と方法、そして翻訳についてのご講演と本研究についてのご指導をいただいた。昨年度の議論のテーマであった世界文学と日本文学の意味と実践を改めて考え直し、この課題を継続して、さらに深化させようとする地点から、本プロジェクトは始動した。ティアニー先生のご講義をうけて、国際的な比較文学研究や海外における日本文学研究の動向を学び、また、新しいメンバーを迎えて、互いの研究の方法や実践、現在の学術的な悩みなどを披露することから、議論がはじまった。第2回の10月末の研究会では、英国での大学・大学院教育を受け、翻訳を通して文学や文化商品の開発の現場で活躍してきたSOASで教える片岡真伊先生をお招きし、異なる文化圏のなかでのイメージを変換・転換させる上の意義と方法、歴史的なものを記述することの意義について、メンバーと話し合った。第3回の12月末の研究会では、概念研究について、国内外で外国人研究者たちとの連携協力のなかで長年実践してこられた国際日本文化研究センター・鈴木貞美名誉教授をお招きして、「文化史の再建から文学史の再編」の注意点と課題について御講義いただいた。講師とともに、メンバーの報告研究や方法論の開拓を考えるための議論をおこなった。第4回目は、とりまとめの研究会としてシンポジウムの形式でメンバーが研究発表をおこなった。専門研究分野が異なるメンバー同士が、どのような共通テーマで今後の共同研究を進めることができるのかについて、話し合う機会をもった。想定していたよりも課題に共通項があり、相互に刺激があった。一年を通して、若手の研究者たちは、非常勤職やその他の職務で多忙を極めており、参加や日程調整に苦労している様子も見受けられた。しかし、学術領域を横断して学術的な繋がりを持ち、グローバル展開を探り、研究発表や論文執筆の機会をもちたいという意欲と願いは強いものがあることは、痛感した。本研究会をつづける意義はあったと実感し、今年度、学びの場や議論の場、領域横断的な人的な相互コネクションを深めたことは、ひとつの実績であると考えている。さらなる学術成果、大阪市立大学およびUCRCの多彩な学術人材をいかした国際的な学術発信については、今後の課題として期待される。

さいごになるが、本プロジェクト研究は、前年度の山本真由子先生のご経験の確実な実績におおいに学ばせていただいて、成り立っていた。この報告書の作成には、執筆者・非執筆者すべてのメンバーの協力がなくしては完成できなかった。とりわけ、山本真由子先生には、多大なご尽力をいただいた。さらに、1年を通して、UCRCの運営委員や事務局のかたがたには、大いにお世話になったことを記して、こころより御礼申し上げたい。

(文責・堀)